青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅲ

"Amae" and Social Adaptation of the Young Ⅲ

篠原　しのぶ・原崎　聖子

キーワード：甘え　社会的適応　人間関係　セルフコントロール　生活意識

はじめに

1996年以来われわれは、「甘え」を性格としてではなく出来る限り行動として捉えつづけてきた。その背景には、性格を再教育すること、変容させることは容易ではないが、外側からでもある程度観察し理解することのできる行動面であれば、人間関係の改善のために或いは、社会的適応を容易にするために、再教育し行動変容を起こさせることができるという考え方を重視したという事実が存在する。

土居健郎はその著「甘えの思想」の中で、『「甘え」は、子供でも、無学な者でも使う日常語で、定義を必要としないいわば自明の語である』と述べている。

そこでわれわれも敢えて「甘え」を概念化することをせず、「甘え」という言葉から連想される行動現象、或いは、「甘え」に関する文献の中に登場することばを中心にして質問を作成し、帰納的に甘えについて考えていくことにした。

これまでの方法としては、まず「甘え」から連想される行動、欲求、感情等の諸現象を100程度選び出して質問項目を作成し、高校生、大学生、成人の男女を対象に日本人だけでなく外国人をも含めて調査を繰り返し、因子分析を行った結果、5～6個の因子の抽出をすることができた。

しかも、我々が作成した質問項目が『本当に甘えを捉えているのか』という疑問に対する検討を加えた結果、これらはすべて、日本人の女子青年・成人から、「確かに甘えである」と捉えられていることも確認されたことは、前回の論文『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ』において報告した通りである。

さらに、これまでに抽出された甘えの因子を、他の社会的適応や性格検査等と絡ませて分析した結果の中には当初、我々が考えていたような肯定的な相関関係がはっきりした形ではほとんど見出されなかったことから、抽出された因子の根底に、或いは背景に存在するものについても研究を進めてきた。

そもそも、個々人の生活意識や価値観は、この世に生を受けて以来どのような環境の中で成長したかによって大いに差が現れるものである。自然環境、両親の養育態度、きょうだいの組合せ、友人関係、宗教・文化的背景等々、影響源である環境の種類は多岐にわたっている。日本においては特に人的環境からの影響力が非常に大きい。例えば、身近にいる親を中心とした年長者から、良いことは誉められ、悪いことは叱られる中で善悪を身につけていくであろうし、きょうだいや友人のように周りにいる同年代のもの達の態度・行動によって自らの行動を制御して育つのである。

表1．甘え因子・寄与率・信頼性係数

	引っ込み思案の甘え	寄与率	信頼性係数
第Ⅰ因子	引っ込み思案である	.804	α=.8458
	控えめである	.783	
	人の陰にかくれる	.697	
	恥ずかしがりやである	.637	
	人の後からついていくほうである	.623	
	受容・承認を求める甘え	**寄与率**	**信頼性係数**
第Ⅱ因子	わかってほしいと思う	.713	α=.8084
	受け入れてほしい	.696	
	かまってもらいたい	.639	
	やきもちをやく	.623	
	寂しがりやである	.622	
	屈折した甘え	**寄与率**	**信頼性係数**
第Ⅲ因子	よく腹をたてる	.770	α=.8018
	すぐ不機嫌になる	.647	
	いらいらする	.614	
	周囲に八つ当たりすることがある	.602	
	ふてくされることがある	.534	
	責任回避の甘え	**寄与率**	**信頼性係数**
第Ⅳ因子	義務をはたさない	.483	α=.6729
	許されると思う	.476	
	責任ある仕事はしたくない	.471	
	責任感がない	.468	
	すぐひとに頼む	.457	
	非自立の甘え	**寄与率**	**信頼性係数**
第Ⅴ因子	甘さがある	.592	α=.7092
	未熟だと感じる	.543	
	自立していないと感じる	.486	
	弱音をはく	.473	
	逃げ腰になる	.431	
	追従の甘え	**寄与率**	**信頼性係数**
第Ⅵ因子	長いものにまかれる	.516	α=.6669
	人に取り入る	.509	
	小異をすてて大同に付く	.494	
	へつらうことがある	.483	
	人に従う	.426	

そこで、このような人間関係の中での「甘え」を考えるには先ず、「甘え」行動をとる本人と、それを受ける或いは観察する他者の感情、という関係で捉えてみることが必要であると考えた。大半の甘え行動は、他者に不快感情を抱かせる可能性が大きいが、前回迄の調査結果から、必ずしも他者の不快に結びつかないものもあると予想することが出来る。我々が抽出した6個の甘え因子は表1に示すとおりであるが中でも、「引っ込み思案の甘え」がそれにあたるであろう。更に、「受容・承認を求める甘え」においては、「頼りにされている」と同じ意味に捉えられやすく、これが対象者の快感情を呼び起こし、相互の信頼関係の基礎を形成することも大いにあると予想することができる。これまで殆どの調査結果において共通に見出された6個の因子についてその下位項目を手がかりとして考察すると、図1のようになると考える。縦軸においてはその行動に対する他者の感情を快・不快で捉える。また横軸においては、ある人がその行動を起こす・拒否するの関係で捉えることとする。

少し説明を加えてみよう。

①の「引っ込み思案の甘え」は、下位項目の、『気兼ねする』『遠慮深い』『控えめである』などから、積極的行動を起こしていないと考えられるし、他者はこれらの態度に対して、甘えというよりは慎み深くてやさしく、気遣いの行き届いたおとなしい人物という印象を抱くであろうので、むしろ快感情につながることが多いと思われる。『謙譲の美徳』『出る杭は打たれる』等の日本的価値観とかかわりの深い甘えであると言えよう。なお、前回も報告したが、この引っ込み思案の甘えの項目の中には、甘えと捉えるよりはむしろ、日本人には好感を持って受け入れられているものがあった。

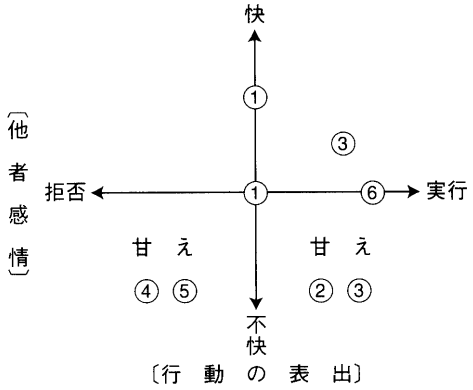
②の「屈折した甘え」は行為者側としては「いらいらする」「不機嫌になる」「八つ当たりする」等の行動を実行に移すであろうし、これを受け止める他者は当然不快感を持つであろう。

③の「受容・承認を求める甘え」は「やきもちを焼く」「かまってほしいと思う」等を行動を表すであろうし、これを受け止める他者は、その頻度や程度が過度になる場合は、うっとうしくなったり負担を感じたりという不快感をもつ事もあろう。しかし、前述したように頼りにされていると考えればこれが快の感情を引き起こすこともありうると思われる。

④の「責任回避の甘え」は、『義務を果たさない』『努力しない』等、文字通り責任ある積極的な行動を否定している。しかもその行動を他者は、卑怯さや不真面目な印象を感じ不快感を持つであろう。

⑤の「非自立の甘え」は、『逃げ腰になる』『弱音を吐く』等、自信のなさも手伝って行動の表出を押さえており、行動することを拒否さえしているであろう。そしてそれは他者からじれったさやだらしなさのような不快感を持って受け止められることが多い。

図Ⅰ．甘えの表出と他者感情



①引っ込み思案の甘え　④責任回避の甘え
②屈折した甘え　⑤非自立の甘え
③受容・承認を求める甘え　⑥追従の甘え

⑥の追従の甘えは、人の後からついていく等の行動を取っており、それを見た他者は、それほど快感をも不快感をも感じないと考えることができる。

このような立場で「甘え」を捉えたとき、家庭においても、学校や社会においても適切な人間関係を保ちつつ生活することを目標とした指導・教育という観点から「甘え」の分析・検討を行うことが更に必要であると考える。

そこで今回は、主として女子大学生を対象の中心に据え、①性別による比較検討、②日本人の甘えと外国人の甘えの比較、③日本的生活意識・価値観の把握、④生活意識と甘えとの関連等の分析を進める。

〔調査対象者〕

福岡県内	女子大学生	271名
福岡県内	男子大学生	156名
中国	女子大学生	171名
中国	男子大学生	107名
米国	女子大学生	17名
米国	男子大学生	16名
カナダ在住日本人男子		7名
カナダ在住日本人女子		16名

〔調査期間〕

平成11年1月　～　平成12年6月

〔調査内容〕

甘え行動に関する項目（5段階評定）	30問
日本的価値観・生活意識項目	60問

〔結果と考察〕

Ⅰ．日本人と外国人の甘え得点比較

表2は各国男女の甘え得点の平均値を示したものである。

表２．各国男女の甘え得点

	中国		アメリカ		カナダ		日本	
	男	女	男	女	男	女	男	女
引込み思案の甘え	11.2 (4.0)	12.1 + (4.0)	12.5 (4.3)	12.8 ns (4.0)	16.1 (2.7)	13.0 + (3.8)	15.2 (3.7)	14.4 ns (4.0)
屈折した甘え	12.7 (4.4)	12.4 (4.1)	13.9 (2.6)	15.1 ns (3.6)	14.8 (5.7)	13.6 ns (3.9)	3.5 (4.5)	15.2 * (3.8)
受容・承認を求める甘え	15.0 (3.8)	16.1 * (3.7)	14.0 (4.9)	13.8 ns (4.3)	16.1 (5.1)	13.6 ns (3.3)	15.3 (5.1)	18.2 ** (3.8)
責任回避の甘え	11.5 (4.1)	11.4 (4.2)	11.9 (4.6)	10.7 ns (3.8)	12.2 (3.9)	12.0 ns (2.9)	12.6 (3.5)	13.8 + (3.4)
非自立の甘え	14.8 (5.0)	16.2 * (4.7)	11.3 (3.5)	12.3 ns (3.6)	12.5 (2.8)	14.3 ns (3.5)	16.3 (4.6)	18.5 * (3.7)

検定結果　＊＊・・・１％　＊・・・５％　＋・・・10％　（　）内はSD

①中国の男女学生の甘え

結果は図２に示すとおりである。

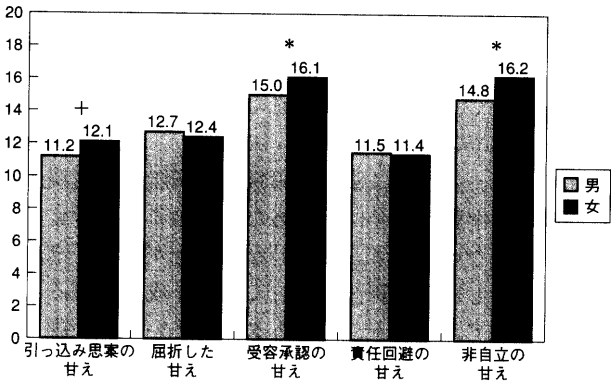


図２．中国学生の甘えの性差

男女間に有意差が見られたものは「引っ込み思案の甘え」「受容・承認を求める甘え」「非自立の甘え」の３因子であり、いずれもわずかながら女子の得点が高く、女子が男子に依存している様子が伺える。しかし、「屈折した甘え」「責任回避の甘え」は男女間に有意な差がなく、他のいずれの国より得点が低い値を示している。これに対して、「受容・承認を求める甘え」と「非自立の甘え」は、他の因子得点より男女ともに値が高く、中国男女学生の甘えの特色をあらわしているものと考えて良いであろう。

②アメリカの青年男女の甘え

次に図３を見ながら、アメリカの青年男女の甘えについて考えてみよう。

アメリカ青年の甘えに男女差が見られたものはなかった。日本の青年男女のデータをもとに抽出されたこの種の「甘え」は、男子・女子というジェンダー的特色としては明確に捉えられなかったということになる。アメリカの文化の中では、男女を問わず誰にでも同様に内在するものであるとも言えるが、一方、男女間の平等意識がこのような他者に対して甘えるという行動面にまで広がっている結果だと推測することも出来よう。

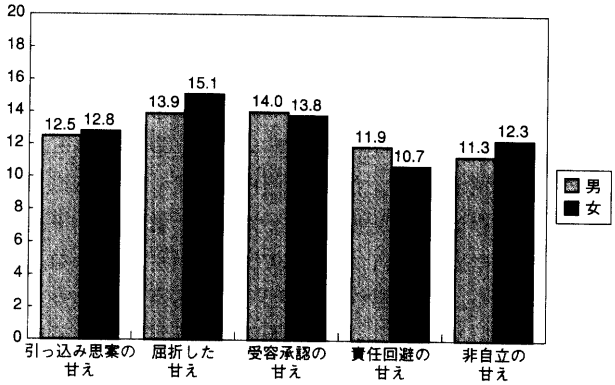


図３．アメリカ青年男女の甘え

また、有意水準には達していないが、女子の「屈折した甘え」は他の甘えに比しても高い得点をしめしている。確証はないがこの表を見る限り、アメリカ女子に何らかのストレス状態があるのではないかと考えられる。この点に関しては文化面、生活面等広く背景の調査を実施する必要があろう。

③カナダ在住の日本人の甘え

次に、カナダ在住の日本人の甘えについて検討してみよう。カナダのデータは他の諸国と異なった性質のものである。第一に男性が平均年齢58歳、女性の平均年齢が48歳という年齢であること。第二に男女ともにカナダに在住してはいるが日本人であることである。第三にカナダ在住期間は男性が平均33年、女子は平均18年ということである。このことを念頭に置きながら、図４のカナダのデータを見ていきたい。

先ず、男女間に有意差が見られたものは「引っ込み思案の甘え」のみで他は大きな差を見出せなかった。しかもこれさえ10％レベルである。このことから、日本人ではあるが長年カナダという文化の中で生活をしてきた人たちは、ジェンダーの区別をあまり感じさせない生活経験をしているものと考えられる。或いは、カナダという国に長年住まおうという姿勢を持っている人達は、もともと、西欧の価値観に順応しやすいタイプの人達である

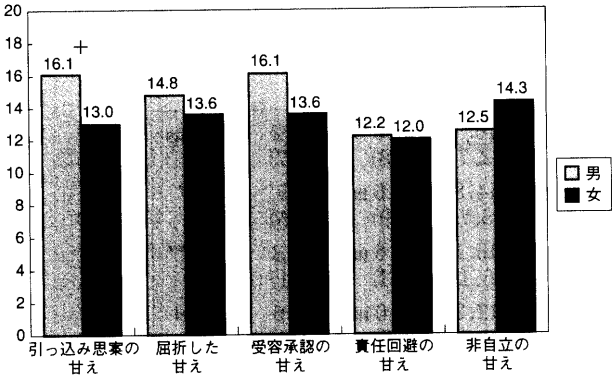


図4．カナダ在住日本人の甘えの性差

と言えるのかも知れない。

とはいえ、カナダのデータを少し詳しく見てみると、有意差のあった「引っ込み思案の甘え」についで「受容・承認を求める甘え」も、有意水準には達していないが、ともに男子の方が得点が高くなっている事がわかる。このデータを見る限り、カナダ在住の男性は女性に比して慎ましく依存的傾向が強いという印象を受ける。牛島義友は、女性は若いころは内向的であるが年をかさねると外向的になり、逆に男性は年を取ると内向的になると述べているが、カナダという異郷の地で長年生活している人達は、かえって日本の伝統的価値観に基づいた生活観を持っているともいえるのかもしれない。いずれにしても興味のある結果である。

④日本の青年男女の甘え

最後に、日本青年男女の甘えについて検討を加えよう。図5にその結果を示す。

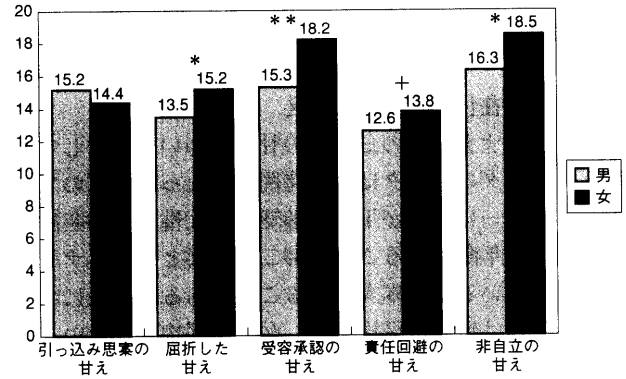


図5．日本青年男女の甘え

日本青年の「甘え」を見ると、「屈折した甘え」「受容・承認を求める甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」に性差が見られ、いずれも女子の方が得点が高くなっている。特に「受容・承認を求める甘え」の女子の得点が非常に高く、『わかってほしい』『かまってもらいたい』『受け入れてほしい』などと強く感じているといえる。外国では見られなかった性差が、ほとんどの甘え因子において見られることから、日本においては、性別役割教育が今日でも尚根強く残り大きな影響を与えていると考えることが出来る。小・中・高校の調査をした結果からも、学校においても又家庭においても教師や親たちは、かなり伝統的性別教育をしていることが明確であり（1990年）、現在の大学生の行動様式や価値観に影響を及ぼしていると伺える。

また、男女ともに「非自立の甘え」の得点が他国に比して非常に高いことから、青年期の未成熟さを青年自身が自覚していると同時に、日本社会がそれを容認していると言える。

⑤日本と他国の甘えについての考察

以上、各国別に甘えの特徴を主として性差という観点から見てきたが、ここで、日本青年を中心に他国との「甘え」得点について比較検討を行なってみる。

第1に日本青年は他国に比して、「甘え」得点が高いといえる。中でもアメリカ青年との比較においては、その差が大きく、ことに「非自立の甘え」は男女ともに有意差を示している。

日本では、大学生はまだ、両親との同居や、両親からの仕送り、学費の依存は至極当たり前のことと考えており、経済的な自立は考えてもいない場合が多い。また、社会の中でも自分が責任をもってことを成し遂げるというよりは、アルバイトやパートタイムといった、誰とでも交替できる仕事に気軽に携わる場合が多いであろう。更に、本業であるべき学業・研究に対しても、自らが進んで真剣に取り組むほどの危機感も情熱や満足感にも触れることはあまりないのではないかと思われる。このような経験の少なさが、自己に対する未熟な感覚を残している原因の一つであると考えられる。

一方アメリカ青年について考えてみると、大学生の多くは自活の道を歩み、生活全般に対して常に自己責任を負い自己決定を行なう習慣が形成されているものと思われる。したがって「甘さ」「未熟さ」「弱音」「逃げ腰」などというものは彼らにとって必要であるどころか却って、自主独立的であり、自由と開放感を味わうことの大きな妨げとさえなるものであると考える。アメリカ青年男女のこの種の「甘え」が他国より低い所以がこのあたりにあると思われる。

中国青年にも日本よりその差が少ないとは言え、男女間に「甘え」得点の差が見出された。この結果は、両国において何らかの性別教育が行なわれていることの現れであると考えることが出来る。一般的に「甘える」ということは子ども或いは女性の中に多く存在するものであると考えられている。事実、今回の日本及び中国というアジア圏にある2国において、女性の方に『わかってほしい』『受け入れてほしい』などの「受容・承認を求める甘え」や『甘さがある』『弱音を吐く』などの「非自立の甘え」の得点が高いという結果を得ている。アメリ

カ社会では男女間に差が見られなかったのに対して、日本・中国というアジアの国において性差が見られたということから、後天的に、社会的・文化的影響を大きく受けるものと考えることが出来る。

また、「引っ込み思案の甘え」は日本において男子の方が得点の高かった唯一の甘え因子である。同じようにカナダ在住日本人男性においても、更に高い得点を示している。アジアにある中国男子が他の「甘え」ではほぼ日本男子と同様な得点を示した中でこの「引っ込み思案の甘え」では有意に低い得点を示している。したがって、一見、「非自立の甘え」と同様の印象をうける「引っ込み思案の甘え」であるが、実は大いに異なり、日本人の文化に関係が非常に深いものであると考えることが出来る。すなわち、『控えめである』『人の蔭に隠れる』『恥ずかしがる』等の項目に代表される「引っ込み思案の甘え」は、カナダ在住の日本人男性に最も強くその甘えが現れており、日本人の伝統的で根強い人生観・価値観が存在しているのである。

現代においては『甘え』の一種であると捕らえれるとしても、日本古来から存在する『あ・うんの呼吸』『謙譲の美徳』『武士は食わねど高楊枝』などの、実際の行動としてはあまり現れない内面の美意識に通じていると考えられよう。

「受容・承認を求める甘え」は、いずれの国においても男女ともにある程度高い得点を示している。したがってこの種の甘えは、特定の社会・文化に偏らない普遍的な要素を含んでいると考えられる。ということは、人が社会の中の、人間関係の中で生活する上で、ある程度素直に表現することが望ましい甘え行動であると考えて良いであろう。

以上、日本青年を中心に、他国の青年・成人の甘え得点に見られる特色を考察してきた。そこで今度は、今日の日本における生活意識や価値観がこれらの「甘え」行動とどのような関係性を持っていいるのかについて考察することにする。

Ⅱ．生活意識・価値観と甘えの関連

前述の通り我々はこれまで、行動としての甘えについていろいろな角度から作問をし、分析を重ねてきた結果、6因子を抽出し、これらの各項目が確かに「甘え」行動であると捉えられていることも確認した。また、日本文化の中で成長した青年たちがもっている「甘え」は、日本独特の価値観や生活意識或いは社会的適応等と深いかかわりがその根底にあるということも確認された。そこで本章においては、日本人に特有の生活意識等に関する項目と甘えとの関係を、大学生女子のデータをもとに検討したいと思う。

〔調査対象〕

福岡県内大学生　　女子　　217名

〔調査内容〕

甘え項目（6因子）　　5段階評定　　30問
日本的生活意識・価値観に関する項目　　60問

〔結果と考察〕

1．生活意識・価値観の因子構成

性役割や人間関係等、日本における生活や価値観の特色をあらわしていると思われる質問項目60問を作成し、5段階で評定させた。その回答結果をもとに因子分析を実施した所、因子負荷量.35を基準として5個の因子が抽出された。各項目、因子寄与率及び因子の信頼性係数は表3に示すとおりである。

ただし第Ⅰ因子については、項目の内容から2分した。即ち『女性の方がこまやかな心遣いが出来る』『女性は家庭的なほうがよい』『女性は喫煙しない方が良い』等を含むものを第Ⅰ因子aとしこれを「伝統的女性役割の因子」と命名し、『男性のほうが決断力がある』『男性のほうが大局的ものの見方が出来る』『男子の方が社会的視野が広い』等を含むものを第Ⅰ因子bとしとしこれを

表3．生活意識の因子分析

第Ⅰ因子a	伝統的女性役割	寄与率	信頼性係数
	女性のほうが細やかな心遣いができる。	.573	α=.6986
	女性のほうが身の回りの世話がよくできる。	.556	
	女性は家庭的なほうが良い。	.460	
	女性は喫煙しないほうがよい。	.399	
第Ⅰ因子b	伝統的男性役割	寄与率	信頼性係数
	男性のほうが決断力がある。	.645	α=.8303
	男性のほうが社会的視野が広い。	.638	
	男性のほうが度胸がある。	.631	
	男性のほうが大局的ものの見方ができる。	.628	
	男性のほうがリーダーシップがある。	.592	
	男性のほうが職務に忠実である。	.552	
	男性のほうが社会的成功を追い求める。	.550	
第Ⅱ因子	自己責任性	寄与率	信頼性係数
	自分の考えはしっかりと主張する。	.737	α=.7646
	自分の考えに基づいて判断する。	.710	
	自分の責任で行動する。	.653	
	自己を素直にPRできる。	.475	
第Ⅲ因子	親との親和性	寄与率	信頼性係数
	親は私の話をよく聴いてくれた。	.795	α=.7817
	いろいろなときに親はよく慰めてくれた。	.770	
	親と話すのが楽しかった。	.725	
	自分にはあまり親の関心が向けられなかった。	−.462	
	親にはよくほめられた。	.389	
	親の手伝いを喜んでしていた。	.373	
第Ⅳ因子	親の厳格性	寄与率	信頼性係数
	礼儀を守るよう親から厳しく言われていた。	.708	α=.8179
	親は決まりを守るよう厳しく注意していた。	.704	
	親の言い付けを守るようきびしく言われていた。	.615	
	親は言葉遣いを厳しくしつけていた。	.598	
第Ⅴ因子	愛他性	寄与率	信頼性係数
	個人の命日を大事にする。	.543	α=.5948
	ボランティア活動をよくする。	.494	
	老人を敬う。	.472	
	宗教的雰囲気（気持ち）を大事にする。	.376	
	進んで障害者と近づきになる。	.373	

「伝統的男性役割の因子」と命名して分析を行なった。

第Ⅱ因子は『自分の考えはしっかり主張する』『自分の考えに基づいて判断する』『自分の責任で行動する』等を含んでおり、これを「自己責任性の因子」と命名した。

第Ⅲ因子は『親は私の話しをよく聴いてくれた』『いろいろなときに親はよく慰めてくれた』『親と話すのが楽しかった』等であり、これを「親との親和性の因子」と命名した。

第Ⅳ因子は『礼儀を守るよう親から厳しく言われた』『親は決まりを守るよう厳しく注意していた』『親は言葉遣いを厳しくしつけていた』等であり、これを「親の厳格性の因子」と名づけた。

第Ⅴ因子は、『故人の命日を大事にする』『ボランティア活動をする』『老人を敬う』等であり、これを「愛他性の因子」とした。

以上は、寄与率、信頼性係数等からかなりの説明力があると考える。

2．生活意識・価値観と甘えとの関係

1章では、毎回抽出されていながら、その項目の中に『付和雷同的である』等、青年たちには少々難解な項目が含まれているという理由で分析から除外していた「追従の甘え」を含めた6個の因子と、生活意識・価値観との関係を見ていくこととする。その関係は表4に示すとおりである。

①「引っ込み思案の甘え」との関係

表から明らかな通り、「引っ込み思案の甘え」とは「伝統的男性性」と正の相関が見られたのに対して、「自己責任性」とは負の相関が見られた。大学生女子の場合、『控えめである』『人の蔭に隠れる』等の「引っ込み思案の甘え」の強いものは、『男性のほうが決断力がある』『男性のほうが社会的視野が広い』等の「伝統的男性性」との間に、つまり、社会的な男性優位志向との深い関係が認められたのである。男性に対して強力なリーダーシップを感じたり、認めたりする女子青年は、自分自身を表面に出すことをせず、人の後からついていくことが多い一方で、自分の考えを主張したり、自分の考えに基づいて行動することが少ないという傾向が強いのである。

②「屈折した甘え」との関係

「屈折した甘え」は「親との親和性」と負の相関を示した。つまり、『よく腹を立てる』『すぐ不機嫌になる』等の屈折した状態は、過去において『親は私の話しをよく聴いてくれた』『いろいろなときに親は慰めてくれた』等、親がいかに自分に対して時間や心を用いてくれたと感じているかということが大きく影響しているといえるのである。

これまで彼女達が親から受けた影響もさることながら、将来母親になる可能性の多い大学生女子が次代を担う子どもを育てるということを考えた場合、『すぐ腹を立てる』『すぐ不機嫌になる』『いらいらする』などの屈折した状況は、『子どもの話を聴く』『慰める』どころか現代世間でよく起こっている幼児や児童に対する暴力、放任、無視などといった事柄につながる可能性が大いに高いと懸念される。子育てに対する親の意識の重要性をあらためて確認すべき結果であると言える。

③「受容・承認を求める甘え」との関係

「受容・承認を求める甘え」とは「伝統的女性性」「伝統的男性性」及び「親の厳格性」との間にそれぞれ正の相関を示した。『わかってほしい』『受け入れてほしい』という感情は、先に述べた通り、アジア、アメリカとも共通して存在する感情行動であったが中でも日本の女性に特に強く現れていた。

この「受容・承認を求める甘え」は『女性の方が細やかな心遣いが出来る』『女性のほうが身の回りの世話がよくできる』というような伝統的に女性が持っているとされている女性優位性と、『男性のほうが決断力がある』『男性のほうがリーダーシップがある』などの男性優位性のどちらをも高く認めているということが出来る。このことは、決して男性と女性が同一化されるということではなく、男女それぞれの役割を尊重して認めていると言った方が良いであろう。

また、『礼儀を守るよう親から厳しく言われた』『親は決まりを守るよう厳しく注意していた』などの「親の厳格性」との相関が認められたことから、親の厳格過ぎる態度が、自分を受容してくれていないと感じた結果『受け入れてほしい』『わかってほしい』という願望につながったと考える向きもあるが、我々は、親が日常生活に

表4．甘え各因子と生活意識の相関

		引込み思案	屈折した	受容承認	責任回避	非自立	追従
生活・価値観	伝統的女性性	.105	−.057	.177**	.031	.050	.242***
	伝統的男性性	.146*	−.133	.184**	−.015	−.031	.269***
	自己責任性	−.436***	−.037	.057	−.251***	−.163*	−.397***
	親との親和性	−.083	−.246***	.024	−.106	−.061	−.002
	親の厳格性	−.077	−.070	.143*	−.027	.079	.060
	愛他性	.001	−.103	−.026	−.178**	−.143*	−.036

検定：＊＊＊……0.1%　＊＊……1.0%　＊……5.0%

示す厳格さによってはじめて、『わかってほしい』『受け入れてほしい』というきわめて初歩的であり基本的でもある人間の持つ欲求を素直に表出することが出来るための重要な役割を果たしているものと解釈したいと考える。

④「責任回避の甘え」との関係

「責任回避の甘え」は「自己責任性」および「愛他性」との間にいずれも負の相関を示した。

まず、「自己責任性」との関係について考えて見よう。

『責任感がない』『義務を果たさない』などのように「責任を回避する」行動は、『自分の考えはしっかり主張する』『自分の考えに基づいて行動する』ということがあまりないということである。一般的に、自分自身が何をしたいのか、言いたいのかということをしっかり持っていない限り、社会生活の中で責任ある行動をとったり、役割を果たしたりすることは困難であると予想されるものである。したがって、個々人の範囲内で行なわれる私的生活においても、家庭・地域・職場社会等における広範囲な人間関係や社会的貢献を期待される立場に立つ人間として、一人一人の個人が、先ず何を求めているのかを意識し、これに基づいて正しく表現し行動に移すことが出来るということが必要であるといえる。

次に「愛他性」との関係を見てみよう。

前述の通りこの種の甘えは、『個人の命日を大事にする』『ボランティア活動をよくする』などの「愛他性」と負の相関を示している。他者や社会に奉仕することや、周囲に心を配るという行動は、非常に高い自己統制力或いは精神力を必要とするものである。したがって、責任を回避するような状態では「愛他」という行動は現れにくいということを裏付けたといえよう。

⑤「非自立の甘え」との関係

「非自立の甘え」は「責任回避の甘え」と同様に「自己責任性」「愛他性」と負の相関を示している。この結果から、日本の大学生女子は、この２種の甘えに高い共通性を持っているといえる。ただ、「責任回避の甘え」が、周りの社会・人間関係を意識した甘えであるのに対して、「非自立の甘え」は『甘さがある』『未熟だと感じる』のように内省的なものであるといってよい。しかもこの内省的『未熟さ』『甘さ』という自覚は、より確固たる自分をつくるための自己反省という前向きの姿勢というよりは、そのままの形で自己責任性を回避し、回りへの配慮も否定するという結果であると読み取ることが出来る。したがって自分の考えをしっかり持ち、自信を持って自己をアピールできるということは、社会人として立派に自立していくための必要要素であるということが出来る。

⑥「追従の甘え」との関係

「追従の甘え」は、「伝統的女性役割」「伝統的男性役割」と正の相関を示し、「自己責任性」とは負の相関を示している。この「追従の甘え」の中には『長いものに巻かれる』『小異を捨てて大同につく』『人に従う』などが含まれている。したがってこの種の甘えの強い人達は、回りの多くの人達が抱いているであろう考え方と同様に、女性に対しては『細やかな心遣いが出来る』『身の回りの世話ができる』『家庭的な方が良い』と考え、男性に対しては『決断力がある』『視野が広い』『度胸がある』などと、両性に対してかなり伝統的価値観をステレオタイプに持ちつづけているということになる。

更に、この甘えは、「自己責任性」と負の相関を示している。つまり、「追従の甘え」の強いものは、自分を特に主張したりその責任を取るという方策を選ばず、他者の大きな力に従うことが無難であると考えているということがわかる。「責任回避」や「非自立」と同様の不安を感じさせる結果である。

3．甘えと生活意識・価値観各項目ごとの比較

以上我々は、「甘え」と「生活意識・価値観」の各因子同士の関係について考察を進めてきたが、当初準備した質問60項目で各因子への負荷量が基準に達せず、各因子に入らなかった項目をも含めて「甘え」との関係を相関という形で検討を更に進めることとする。

①「引っ込み思案の甘え」との相関

「引っ込み思案の甘え」と１％以上の有意な相関を示した項目は表５のとおりで12項目であった。その代表的なものの中で負の相関を示したものは『自分の考えに基づいて判断する』『自分の考えをしっかり主張する』『自分の責任で行動する』『自分を素直にＰＲできる』等であり、逆に『周りの人に歩調を合わせる』『義理を大事にする』『他人の意見に同調する』等とは正の相関を示

表５．引っ込み思案の甘えとの相関

引っ込み思案の甘え
(0.1%　水準の相関を示した項目) ・結論はできるかぎり曖昧にする（＋） ・義理を大事にする（＋） ・自分の考えはしっかり主張する（－） ・自分の判断に基づいて判断する（－） ・自分の責任で行動する（－） ・自己を素直にＰＲできる（－） ・人の短所が目につく（＋）
(1.0%　水準の相関を示した項目) ・一緒にいる人に歩調を合わせる（＋） ・年長者に従う（＋） ・周りの人の気持ちを推し量る（＋） ・他人の意見に同調する（＋） ・女性は喫煙しないほうがよい（＋）

した。これらの項目を見ると、自分を前面に押し出すことには躊躇しているが、周りの人や年長者に対して、円滑な人間関係を育もうと努力している状態がうかがわれる。「引っ込み思案の甘え」は、一般的にあってはならない甘えとして多くの青年・成人から認められづらいものであったことは前述のとおりである。こうして甘えの背景にあるものを項目ごとに見ることによって、「引っ込み思案の甘え」傾向の強い人達の行動パターンが裏付けられたと考えて良いと思う。

②「受容・承認を求める甘え」との相関

「受容・承認を求める甘え」と1％以上の相関が見られた項目は「引っ込み思案の甘え」と同様12項目に見られた。その項目は表6に示すとおりである。

表6．受容・承認を求める甘えとの相関

受容・承認を求める甘え
(0.1%　水準の相関を示した項目) ・義理を大事にする（＋） ・人脈（コネ）を大事にする（＋） ・他人の意見に同調する（＋） ・回り人の意見を聞き入れる（＋） ・自分の家庭のことを他の人に話す（＋） ・女性は家庭的な方がよい（＋）
(1.0%　水準の相関を示した項目) ・一緒にいる人に歩調を合わせる（＋） ・時と場合により融通をきかせる（＋） ・人の短所が目につく（＋） ・悩みなどのうちあけ話をする（＋） ・男性の方が度胸がある（＋） ・男性の方が職務に忠実である（＋）

この甘えとはいずれの項目も正の相関を示している事がわかる。例えば、『回りの人の意見を聞き入れる』『人脈を大事にする』『一緒にいる人に歩調を合わせる』『女性は家庭的な方が良い』『男性のほうが度胸がある』などである。これらの項目を見ていると、「受容・承認を求める甘え」の強い人達は、男性・女性に対する伝統的性役割意識が明確であり、自己開示性が高く、回りとの人間関係をも大切にしており、この種の甘えは、社会的適応能力を育むためにはあってもよい甘えの一種であるという以前からの我々の主張を裏付ける結果であると思われる。ただし、この甘えを意図的に、武器としてあるいは道具として利用しようとすると、却って他者に不快感を抱かせてしまう結果にもなり兼ねないと考える。

③「屈折した甘え」との相関

「屈折した甘え」と1％以上の相関が認められた項目は表7に示す通り6項目であった。その中で5項目は負の相関であった。例えば『先ず相手の長所を見つける』『いろいろなときに親はよく慰めてくれた』『親によく誉められた』などである。唯一正の相関を示したものも『人の短所が目に付く』である。この甘えは因子の固まり同士で検討したときも、「親との親和性」と負の相関を示しており、そのときにも触れたが、親から親和的な養育を受けたという実感の薄さが、屈折させてしまうのであり、また、今回明らかになったように、人の長所を見つけることをせず、短所に目が行くという行動が、いかにも屈折した表現であるということがわかる。三隅二不二のＰＭ式リーダーシップ論で言えば、まさにM的要素の欠如が青年の甘え表現を屈折させてしまうものと考えられるし、因子の塊の中に入り込めなかった項目を細かく見ていくことも、甘え行動の背景を探ることに不可欠であると言える。

表7．屈折した甘えとの相関

屈折した甘え
(0.1%　水準の相関を示した項目) ・まず相手の長所を見つける（－） ・色々な時に親はよく慰めてくれた（－）
(1.0%　水準の相関を示した項目) ・食べ物の好き嫌いはない（－） ・人の短所が目につく（＋） ・親によく褒められた（－） ・親は私の話をよく聴いてくれた（－）

④「責任回避の甘え」との相関

「責任回避の甘え」と1％以上の相関を示した項目は表8の通り9項目であった。前述の因子同士の関係を見たときには、「自己責任性」「愛他性」といずれも負の相関を示していたが、各項目ごとにこれを見ると、どの因子にも入らなかったもので、『結論は出来るだけ曖昧にする』『人間は実力が第一である』などと正の相関が見られている。実力第一と考えて責任回避をしているのは、自らに自信をもてないためであろうし、結論を曖昧にす

表8．責任回避の甘えとの相関

責任回避の甘え
(0.1%　水準の相関を示した項目) ・結論はできるかぎり曖昧にする（＋） ・年少者をいたわる（－） ・自分の責任で行動する（－） ・少々無理をしても人に協力する（－）
(1.0%　水準の相関を示した項目) ・人間は実力が第一である（＋） ・時と場合により融通をきかせる（－） ・老人を敬う（－） ・自分の考えはしっかり主張する（－） ・自己を素直にＰＲできる（－）

るというのも、同様に考えることが出来よう。いずれにしてもこの種の甘えの強い人達は、社会の中で他者から不愉快な気持ちで見られ、輝いて仕事に携わることのできにくい生き方をするのではないだろうか。

⑤「非自立の甘え」との関係

「非自立の甘え」と１％を超える相関があった項目は表９に示す通り、３項目のみであった。因子同士で見ときには、相関の程度が低いながらも（p<.05「責任回避の甘え」と同様「自己責任性」と「愛他性」とに相関が認められ非常によく似た甘えであると感じていた。しかしこの表を見ると、因子の中に含まれていないものとの相関が見られている。いずれも自立している人には見られない項目であり、「非自立の甘え」をもつ人の弱さをあらわしているようである

表９．非自立の甘えとの相関

非　自　立　の　甘　え
（0.1%　水準の相関を示した項目） ・結論はできるかぎり曖昧にする（＋）
（1.0%　水準の相関を示した項目） ・自分の責任で行動する（－） ・自分の家庭のことを他の人に話す（＋）

⑥「追従の甘え」との相関

「追従の甘え」と１％以上の相関が認めれた項目は、表10に示す通り16項目有り、６個の甘え因子の中で最も多かった。「受容・承認の甘え」と同様、「伝統的女性性」「伝統的男性性」の両因子に含まれている項目は全て正の相関が高くなっている。かなり男女平等参画型の社会構造が進んでいるはずの社会であるが、いまなお、「追従の甘え」得点の高い大学生女子達は、伝統的に保たれてきた男性・女性に期待されている性役割を尊重していることがわかる。

これに対して「自己責任性」に含まれる項目は負の相関を示している。これも自らの責任で考え、行動し、自己の考えを主張することによって余計な責任を背負うよりは、他の人に従い、長いものに巻かれ、大部分の人の意見にしたがった方が気楽に生活できるという考えによっているのであろう。日本的謙譲の美徳が根付いていることの現れであると言える。

以上日本の大学生女子のデータに基づいて「甘え」行動の背景にあって甘え行動に影響を与えていると思われるものについて検討を加えてきた。

第１部で報告した通り、日本青年の男女にかなりの性差が確認されている。したがって、生活意識との拘わりに関しても今後分析を加えていく予定である。更に現在大きな問題になっている若者の生活指導にも役に立つ提言を行なうべく研究を進めていきたい。

表10．追従の甘えとの相関

追　従　の　甘　え
（0.1%　水準の相関を示した項目） ・結論はできるかぎり曖昧にする（＋） ・年長者に従う（＋） ・他人の意見に同調する（＋） ・自分の考えはしっかり主張する（－） ・自分の考えに基づいて判断する（－） ・自分の責任で行動する（－） ・周りの人の意見を聞き入れる（＋） ・女性は家庭的な方が良い（＋） ・男性のほうが度胸がある（＋） ・男性のほうが社会的成功を追う（＋）
（1.0%　水準の相関を示した項目） ・食事の注文は他人に左右されない（－） ・人脈（コネ）を大事にする（＋） ・他者からの評価は気にならない（－） ・女性は喫煙しない方がよい（＋） ・男性のほうが社会的視野が広い（＋） ・男性のほうが職務に忠実である（＋）

【参考文献】

土居健郎　『「甘え」の構造』　弘文社　1971
土居健郎　『「甘え」推敲』　弘文社　1975
土居健郎　『「甘え」の周辺』　弘文社　1987
土居健郎　『「甘え」の思想』　弘文社　1975
シャーウィン裕子　『女たちのアメリカ』　講談社　1991
加藤諦三　『甘えの心理』　大和出版　1994
中山　治　『甘えの精神病理』　洋泉社　1996
土居健郎　『聖書と「甘え」』　ＰＨＰ新書　1997
篠原しのぶ　『日本及び中国における青年男女の「甘え」に関する調査研究』　福岡女学院大学紀要７号　1997
篠原しのぶ・原崎聖子　『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅰ』　福岡女学院大学　人文学研究紀要　人文学研究第２輯　1999
北山　修他　『日本臨床３　「甘えについて考える」　星和書房　1999
篠原しのぶ・原崎聖子　『青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ』　福岡女学院大学紀要　人間関係学部編　創刊号　2000